

著者 Ole Busck, Herman Knudsen and Jens Lind (2010)

タイトル

「The transformation of employee participation: Consequences for the work environment」

【要約】

この論文は、従業員の参加や彼らの影響力と職場環境の関係についての研究文献に関して記述されている。これらの関係については先行研究によって肯定的な結果が示されているが、最近の心理社会的な労働環境の問題に関する研究によると高い職務上の要求を補うためのコントロールモデルという前提に疑問を呈している。そこで、従業員参加に関する数十年分のデータを基に参加概念の「解体」を出発点とし、なぜ従業員参加の増加というものが健全な労働環境をもたらさないのかについての疑問を投げかけたのがこの論文である。

ここでいう従業員の参加とは、会社全体の意思決定に従業員が参加し影響を与えることである。これは多くの点で包括的なものであり、参加の達成による影響は必ずしも個人・身近な仕事の状況に関連したのではなく、部門や会社などより大きな母体での活動等を通じて達成されることもある。

結論として、管理モデルを再考するカギは使用者の新しい管理・統制の形態が従業員の実際の職務管理と職場環境に重要な決定への参加の両方へと与える認識を意識することだといわれている。

【感想】

この論文を読んで、経営者側ではなく従業員側の意思というものを軸に考えていたので面白かった。特に、心理的な部分(ストレスなど)も併せて考えていることから職務上のメリット・デメリットのみならずストレスなども加味することで正確な意思決定を調査することができると考えられる。また、これらを基に経営者が職場環境というものを考える手助けになると考えられ、双方にメリットがあるものだと考えられる。自分も将来就職することを考えると、職場環境がいかに重要かということを理解できたため、これを活かしていけたらと思う。